

-文化財めぐり

甦る出島

～国指定史跡 出島和蘭商館跡～

発行日 平成20年3月21日
発行所 長崎市魚の町5-1
長崎市教育委員会
生涯学習部文化財課
095-829-1193



元龜2年(1571)長崎の港にポルトガル船が初めて入港し、貿易港長崎が誕生しました。これ以降、長崎の町は海外からの様々な文物、文化を取り入れ、飛躍的に繁栄します。その中心となったのが、出島と唐人屋敷。なかでも、出島は永きに渡り、オランダの中継貿易の拠点の一つとして、世界各地の貿易品が行き交い、西洋の文化、學術の窓口となりました。今、出島和蘭商館跡では、往時の姿を取り戻すべく、様々な復元整備事業が進められています。

日時 平成20年3月23日(日) 10:00 ~ 12:00
コース 旧長崎内外クラブ ~
A班 カピタン部屋~乙名部屋~二番蔵(貿易館)~旧石倉(考古館)
B班 旧石倉(考古館)~二番蔵(貿易館)~カピタン部屋~乙名部屋
~中央広場
主催 長崎市教育委員会
講師 長崎市教育委員会 出島復元整備室 山口美由紀
出島復元整備室 豊田亜貴子

1 出島の立地と歴史

出島和蘭商館跡は、長崎市の中心部を流れる中島川の河口に位置します。出島は長崎の岬の突端に人工的に構築された築島で、特徴的な扇の形をしていたことが知られています。往時の面積は約 15,000 m²でした。

日本におけるキリスト教の布教を禁止した江戸幕府は、ポルトガル人を収容するため、長崎に出島を造ることを命じました。寛永 11 年（1634）長崎の町人 25 名が出資し、出島の築造に着手、2 年後には完成し、市中に雑居していたポルトガル人を住まわせます。その後、禁教令の強化により、ポルトガル人は渡航禁止となり、出島から追放されました。空き家になった出島には、寛永 18 年（1641）平戸から長崎・出島にオランダ商館が移転し、日蘭貿易の拠点となりました。

以後、安政の開国に至るまで 218 年間にわたり、出島を通じて西洋の学問や技術、文化が伝えられ、日本の近代化に大きな役割を果たしました。また、出島を通じて、海外に日本の銀・銅や磁器などが輸出され、また、日本の文化も紹介されました。



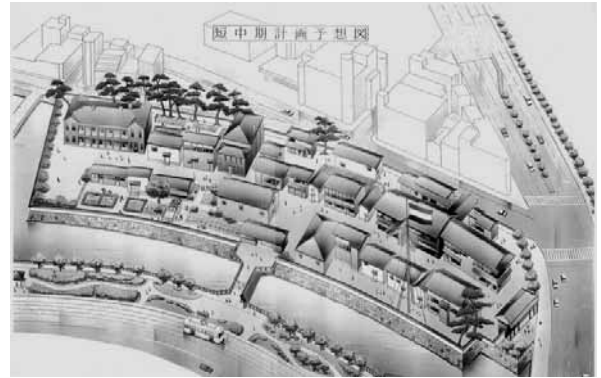
現在の出島和蘭商館跡 西側から

2 復元整備事業

江戸時代が終りを迎え、新たに諸外国との通商を結ぶ中、大型船が入港できる近代的な港に生まれ変わることが、長崎の港にも求められました。そのような中、出島の周囲は次第に埋め立てが行われ、明治期の大規模な港湾改良工事により出島は完全に内陸化し、扇形の姿を失いました。その後、大正 11 年（1922）に出島和蘭商館跡として国指定史跡に指定され、現在に至ります。

長崎市では、失われた往時の出島を現代に甦らせるべく、1951 年より整備計画の策定に取り組みました。1978 年に長崎市出島史跡整備審議委員会を設置、史跡整備の方針について検討を重ね、1996 年には審議会の答申を得て、本格的な復元整備事業に着手しました。

復元整備事業は、具体的な建造物の復元を打ち出した短中期計画と、出島の顕在化を基軸とした長期計画



中期復元整備計画予想図

からなります。

短中期計画は、25 棟の復元建造物を建造するものです。建造物復元時期については、古絵図が比較的多く残され、オランダに往時の建物の模型が現存する 1820 年代頃に設定されています。この計画では出島の西側から順に建造物の復元を行い、東側では今も現存する明治期以降に建てられた洋館群も併せて活用を行います。また、失われた扇形の出島の顕在化を行なうため、現在南側及び西側の一部に堀を作り、護岸石垣の整備を行なっています。

長期計画では、さらに出島周辺の交通網の整備、中島川、銅座川の流路の変更により、出島の四方を水面とし、19 世紀初頭の海に浮かぶ出島を再現します。

3 第 期復元整備事業について

長崎市が、平成 8 年度から本格的に取り組んでいる出島復元整備事業により、出島は再び往時の姿を取り戻しつつあります。

日蘭修好 400 周年にあたる平成 12 年春には、第 1 期事業が完成し、出島西側の復元建造物 5 棟（ヘトル部屋、一番船船頭部屋、料理部屋、一番蔵、二番蔵）が一般に公開されました。さらに西側・南側護岸石垣の一部も復元され、往時の海に浮かぶ島の姿をあらわにしました。

続く第 2 期事業は、平成 13 年から着手、大きく 3 つの柱となる事業に分けられます。一つは失われた出島の扇形を取り戻すことを目標とした顕在化事業で、具体的には南側護岸石垣の調査と整備が 131m に渡り行われました。二つめは、19 世紀初頭の建造物の復元事業です。すでに完成している 5 棟とあわせ、10 棟の復元建造物が完成することにより、出島西側に往時の町並みが姿を現しました。とくに第 2 期事業では、中心的な建物であったカピタン部屋（商館長の居宅）や貿易品が出入りした水門の建設が含まれていました。三つめは、出島全体の展示活用で、新しい建物の展示と旧施設の再活用を行いました。これらの事業の推進

にあたっては、平成 13 年度から出島敷地内の発掘調査を開始し、その成果をもとに個別に設計を行い、平成 17 年度に全ての事業に区切りをつけ、完成の運びとなりました。



カピタン部屋・乙名部屋跡の発掘調査

4 護岸石垣の修復

第 期事業では、南側護岸石垣の調査と整備が 131 m に渡り行われました。この石垣は、往時は海に面していたため、常に潮の干満の影響を受け、台風時には荒波を受けました。最初に護岸石垣の発掘調査を実施、地下に掘り進むにつれ、潮の影響を受けるようになりましたが、石垣の残り具合は非常によく、下段から中段までの石積みが見つかりました。石垣の積み方や石材のもつ特徴などの調査と併せ、石積みの孕み出しや破損状況、欠損部の確認など、修復に必要なデータの記録を行い、これらの調査成果や記録を基に修復が必要な範囲を決定し、石垣の解体調査を行いました。さらに石垣の裏込め工法や遺物の出土状況などから、往時の土木技術や石垣の破損履歴等が分かりました。

これらの調査成果に基づき、石垣の修復工事が行われました。石垣は往時の時代から今に残された遺跡の一部であり、本物の遺構であるため、調査から整備に



発掘された南側護岸石垣

かけて、出島の石垣がもつ特徴を損なうことがないよう十分な配慮を行いました。現在、出島の外周を巡る歩道から、これらの整備された石垣をご覧になることが出来ます。

5 復元された建物

19 世紀初頭の建造物の復元事業では、新しく 5 棟の建物が完成しました。すでに第 期事業において、完成している 5 棟とあわせ、10 棟の復元建造物が完成することにより、出島西側に往時の町並みが姿を現しました。

新しく復元された 5 棟の建物は、カピタン部屋、乙名部屋、拝礼筆者蘭人部屋、三番蔵そして水門です。出島の中心的な建物であったカピタン部屋については、建造物復元に際し、参考とする史料として上位に位置付けられているプロムホフの出島模型（ライデン国立民族学博物館所蔵）が現存しないため、2階平面図や幕末期の古写真、絵画史料などを整理し、復元がなされました。完成した建物は、正面に三角屋根の階段があり、外壁にブラケット（壁付照明）が付き、バルコニーの手摺りには鮮やかなグリーンペンキが塗られました。室内には、様々な柄の唐紙が貼られ、重厚な作りとなっています。カピタン部屋は出島への来客をもてなす迎賓館としての役割を持ち、また商館長の居宅として私的な機能をも合わせ持った建物でした。これに比べ、日本人役人の仕事場としての機能をもっていた建物が乙名部屋でした。この建物は、町屋風の造りになっており、カピタン部屋と比べた時にその違いがさらに浮き立ちます。このように、出島内において貿易の拠点であった蔵、商館員の生活の場であった居宅、出入りした日本人役人の詰所など、様々な機能をもつ建物の復元が行われ、往時の生活や貿易の仕組みが具体的に見えてきました。



復元された 10 棟の町並み

6 復元建物と洋館等の活用

現在、出島は、江戸時代の復元建造物が建並ぶ復元ゾーンと明治期以降の建物を活用した交流ゾーンに分かれます。復元ゾーンでは、建物、外構、内部の再現と総合的に19世紀初頭の出島の復元に取り組みました。交流ゾーンは歴史的に価値のある洋館の活用と庭園の整備による憩いの場の形成、そして出島の整備を進めていく中で明らかとなった研究成果の発表の場と位置付けました。

その中で、復元建物については、生活再現展示とテーマ展示の大きく二つに分け、それぞれの建物の展示を行っています。生活再現展示では、19世紀初頭の復元建造物に合わせ、同時期のある日に情景の設定を行い、調度品の配置を行っています。代表的な例として、**カピタン部屋**2階の大広間で、阿蘭陀冬至の祝宴の情景を再現しています。カピタン部屋は、人が集まる空間であることから、シーン設定に公的な要素が強く出ています。対照的に**一番船船頭部屋**の2階において、商館員や船長の私室を再現しています。



カピタン部屋2階 大広間再現展示

テーマ展示では、貿易、蘭学、考古学、建築など出島に関連するテーマごとに、展示を行っています。これらの各々のテーマが、出島が多面的なものであることを示し、さらに相互に関連付けることによって総合的な出島像が見えてきます。

二番蔵（貿易館）では、貿易と文化の交流として中継貿易により行き交った貿易品の実物資料や文化について紹介しています。貿易については、日蘭貿易と称しつつも、その中身は世界各地に設置されたオランダ商館を拠点とした世界的なものでした。

拝礼筆者蘭人部屋（蘭学館）では、出島を通じて紹介された蘭学、洋学について紹介しています。出島が蘭学の源であることから、科学、医学、天文学、語学等の学術や機器を伝えた出島の商館長、商館医、そして阿蘭陀通詞たちを中心に取り上げています。

交流ゾーンにある**旧石倉**（考古館）では、発掘調査

により出土した遺物を中心に展示しています。出島から出土した貿易陶磁や、オランダ商館員の暮らしが分かる数々の資料が見られます。

旧出島神学校では、企画展示室を設け年数回の企画展を実施しています。体験展示室では、出島のビリヤードやバドミントン等が体験できます。またウンスンカルタや江戸参府双六など昔の遊びや出島をモチーフにしたゲームで、遊びながら学ぶことが出来ます。

明治36年（1903）に長崎に在留する外国人と日本人の親交の場として建てられた、**旧長崎内外クラブ**では、居留地時代の出島の様子を知ることが出来ます。



現存する明治期の洋館 旧出島神学校



体験展示室の様子

7 その他の見どころ

この他にも、出島には見どころがたくさんあります。県指定史跡の**ケンペル・ツェンペリー記念碑**は、文政6年（1823）に出島オランダ商館医として長崎に渡来したシーボルトが、かつて同じく商館医として渡来したケンペル（1690年に渡来）、ツェンペリー（1775年に渡来）の功績をたたえ、これを記念するため文政9年（1826）に出島の庭園に建てました。石碑には、ラテン語で碑文が刻まれ、シーボルトのサインも見られます。

出島の中でもひととき目立つ高木は、県指定天然記念物の**デジマノキ**です。ナンヨウスギ科の常緑高木で、学名はアガチス・ダマラ。幕末のころオランダ人によって、インドネシアのジャカルタ地方からもたらされたと伝えられます。